

高木神考

主 山 倫太郎

(国文学専攻博士後期課程三年)

一、はじめに

『古事記』には今もなお難解とされる伝承がある。⁽¹⁾ その中のひとつとして、近年ほとんど研究されていない神がいる。タカギ(高木神)という神である。『古事記』にのみ見られる神で、突然登場する。タカミムスヒ(高御産巢日神)の別名と『古事記』は注記を加えているが、他の別名を持つ神と比較しても、その登場と存在は異質と言えよう。

何が異質かというと、登場の仕方である。『古事記』の神話を順に読み進めると、別名を持つ神は多々存在し、珍しいわけではない。だが、いずれの神も、初出の段階で「○○○神(命)、亦の名は……」と別名を明記している。

しかし、タカミムスヒにはそれが無い。唯一の例外である。⁽²⁾

タカギとはいかなる神なのか、そしてタカミムスヒと結びついた所以は何か、本論はこの二点を問題提起し、考察を試みるものである。

二、先行研究

まずは、タカギが今日までどのような論考がされてきたのかを整理したい。『古事記』研究の基礎である本居宣長の『古事記伝』(以下、『記伝』と表記)は次の通りにある。⁽³⁾

高木神、御名義木は具比の切りたるにて、即ち産巢日と申すと同意なり、其故は、上の角杙神活杙神の杙は具美と通て具牟とも活く言なり、されば角杙は角具牟と同意なり、葦などに角ぐむと云も、角の形して生初るを云、又なべて木草の生初るを芽ぐむと云、涙の出初るを、涙ぐむと云て、具牟は、凡て物の初まり芽すを云辞なれば、産霊と同意とは云なり、彼角杙神を姓氏録に角凝魂命と云、活杙神を生産日神とも申すにて、思ひ定むべし(三代実録卅四に筑後国高樹神と云あり、此神か、はた地名などにて、しらず)

タカギという名義については、「木」(キ)は「具比」(グヒ)と通じるとし、その根拠に神世七代に数えられるツノグヒとイクグヒ、

『新撰姓氏録』を参考にしながら、ムスヒと同義とする。

ゆえにタカミムスヒと結びつくことに違和感はないということなのだろうか。どうやらそうではないようだ。神名の変化について次のように続ける。

是高木神者云々てふ十四字は、本文ながら註なり。記中に如此る例多し。さて此れより上には高御産巢日神とのみあるを、此に至て其御名を変て、かく高木神と申し、此より下は皆中巻までも、たゞ此御名をのみ申せるは、如何様にも所以あるべし。

故つらく思へども慥に思得ることもなし。されど強て云ば、初稗田阿礼が詔命を蒙し時に、高御産巢日神と申伝へたる本と高木神と申伝へたる本と二品の本に拠けむ。此より上は其の高御産巢日神と有し本に依れりしを、其本は蓋此わたりより下つ方の闕て無りけむ故に其よりは高木神とある方の本に依て、其隨に誦定めしなどにやあらむ。「若然もあらばかの弓矢の名の前と後と異なるとも伝の本の別なる故にもやあらむ」。さて此に至て俄に御名の更れる故に是高木神者云云と云ふ注の語を加へて誦しなるべし、されば此の注は阿礼が誦定めし時よりの詞ならむ。

次に倉野憲司氏の『古事記全註釈』（以下、『註釈』と表記）を見てみよう。⁴⁾

文字通りの名義であらう。（中略）「是高木神者、高御産巢日神

之別名」といふ註記が、いつ誰によつて施されたかといふことが問題となる。高木神の名による伝は中巻神武記にまで及んでゐる。古事記の編纂説を唱える人々は、安万侶が施したものと見てゐるが、古事記の撰録に際して、正伝のみを前後取捨して綴り合したのではなくして、阿礼の誦習した旧辞において既に接合されてゐたと見るのが穏やかではあるまいか。

西郷信綱氏の『古事記注釈』（以下、『注釈』と表記）はこう解釈している。⁵⁾

まず、天の神のしるしものである弓矢の名が天之麻迦古弓・天之波波矢から天之波士弓・天之加久矢へと同じ話のなかで変つてゐるのが問題である。しかも天若日子が雉を射殺したのは波士弓・加久矢を以てであつた。このいい換えと、タカミムスヒの名が高木神に転換したことは相関関係にあると考えられないか。しるしものの弓矢のことにあずかるのは、天照大神ではなくタカミムスヒ＝高木神だという点に注目したい。「高木神、其の矢を取りて見したまへば、血、其の矢の羽に著けり。是に高木神、『此の矢は、天若日子に賜へりし矢ぞ』と告りたまひて、即ち諸の神等に示せて詔りたまひしく、云云」とあるのが、そのことを明瞭に語っている。書紀もこの点はまったく同じである。（中略）弓矢のことにあずかるのはタカミムスヒである。

ところがその弓矢の名が麻迦古弓・波波矢から波士弓・加久矢

へといひ換えられる。かくいひ換えられたハジの木こそが、タカミムスヒを高木神に転轍するきっかけになっているのではなからうか。

尾崎暢殃氏『古事記全講』⁶⁾

高御産巢日の神の別称。天つ神は高い巨樹に降り憑くとする思想から出て、その憑代となった巨樹によって高木神と称したものとされる。別に、古代人が樹木の生育繁茂に奇霊の力を感じ、生産発達の氣に神を認めて樹木を崇拜したところから出たとする見解もある。竹取物語にみえる「なよ竹のかぐや姫」の称なども、古人が若竹の急速な成長力に驚異を感じ、神秘の感をいだいたところから出たと思われるから、高木の神の神名を生じたのであろう。ちかごろ戸谷高明氏は、「巨木に対する信仰から生れた『高木神』が造化神として昇格し、タカミムスビの名によって神代史の初めが一方で創出された結果、このような現象を招いたとも考えられよう。書紀が、すべてタカミムスビの神であるのは、『高木神』の伝承を一切、タカミムスビの名によって統一し構成したからではないだろうか。したがって『高木神』という名称をとどめたところに柔軟性をもった古事記の性格をみることが出来るかも知れない」とのべられた。

以上、四氏の注釈書からタカギの解釈を並べてみた。順に要約してみよう。宣長の『記伝』だが、「強て云ば」とあるように、なぜ途

中でタカミムスヒからタカギに変更されたのかについては、頭を悩ませていた様子が窺える。

その強いて言うことには、太安万侶に聞かせた稗田阿礼が『古事記』を誦する際、二つの原資料を用いたために発生した問題であるとする。しかし、この説は成立しない。何よりも宣長自身がこの説を唱えた時点で、矛盾した見解であることを自ら示唆しているからだ。

それは「初稗田阿礼が詔命を蒙し時に、高御産巢日神と申伝へたる本と高木神と申伝へたる本と二品の本に拠けむ。」という箇所である。

実は、宣長は『記伝』巻二にて、「彼天皇（天武）の大御口づから、此旧辞を誦誦坐して、其を阿礼に聴取しめて誦誦坐大御言のまゝを誦うつし習はしめ賜へるにもあるべし。」という見解を提示している。

両者のうち、もし前者を真と仮定すれば、後者は破綻してしまうことから、宣長の解釈は不適当と言わねばなるまい。そしてこのことは、倉野氏も同様の見解を提示している。⁷⁾

それでは、倉野氏の『註釈』はどうか。タカギという神名についての解釈は単純明快で、名義通りの一言で終わっている。そして、先の宣長の注釈を引用し、それを否定した上で、タカギという神名がタカミムスヒの別名であるといった注記を、いつ、誰の手によつ

て施されたのが重要な問題と指摘する。

この提起した問題については、従来の先行研究すなわち「安万侶が施したもの」という見解を打ち消し、阿礼が読んだ『古事記』が既にタカミムスヒとタカギが接合されていたと考える方が自然であるという。

西郷氏の『注釈』は、アメワカヒコが派遣される前とされた後に出てくる弓矢の名称の差異に着目し、この変換が影響しているのではないかという試案を論じた。

氏が指摘する通り、このアメワカヒコの場面は前後に登場する物の名称や神名の差異が目立つ。事実、氏が疑惑を向けている弓矢は派遣前と派遣後で名称が変わっているし、アメワカヒコの死後に弔問へ訪れるアジシキタカヒコネ（阿遲志貴高日子根神）という神名も、初出時はアジスキタカヒコネ（阿遲鋤高日子根神）であった。⁵⁾

この神も『古事記』研究において難解とされている箇所所未だに定説を見ずにいる。

ただ、こうした名称の変化は氏の指摘したように、アメワカヒコの派遣前と派遣後で弓矢の名称が言い換えられたことに起因するものだとしたら当たらずとも遠からずとは言えまいか。したがって、氏の試案は一考の価値が十分に認められものと言えよう。

尾崎氏の『全講』は、天つ神の降臨する憑代が巨木であるという古代信仰のひとつだとする、民俗学的な論を支持している。そして、

タカミムスヒからタカギへという神名の転換については戸谷氏の論考⁶⁾に域を留めている。

右に並べた四氏の注釈はいずれも歯切れの悪く、タカギという簡易な神名とは反比例してその解釈の難しさが示現されている。

研究論文としてのタカギに関する先行研究は、尾崎氏が引用された戸谷高明氏や西川順士氏¹⁰⁾、岡田精司氏¹¹⁾上田正昭氏¹²⁾、荻原浅男氏や鴻巣隼雄氏¹³⁾、竹野長次氏¹⁴⁾などの学者による論考が発表されてきたが、いずれも明確な結論を見出せずにいるままで、近年ではタカギを単体に対象とした研究は少なくなった。

もっとも新しい研究としては溝口睦子氏が、二〇〇六年に発表した『高木神について』¹⁵⁾が最後である。

これらの先行研究を踏まえた上で、改めてこの神を考察する際、どのような方面から切り口を開けばよいか。あらゆる側面から切り出すことは可能だが、やはり『古事記』の本文にこだわっていくことでこの神の実態を探りたい。

まずは、タカギの登場から最後の登場まですべての箇所を載せてみてゆこう。

二、タカギの登場

左に並べるようにタカギの登場箇所は全部で六つである。なお、本文の引用は、『新編日本古典文学全集 古事記』によった。

1、爾くして、其の矢、雉の胸より通りて、逆まに射上がりて、天の安の河の河原に坐す天照大御神・高木神の御所に逮りき。是の高木神は、高御産巢日神の別名ぞ。故、高木神、其の矢を取りて見れば、血、其の矢の羽に著けり。是に高木神の告らさく、此の矢は天若日子に賜へる矢ぞとのらして、即ち諸の神等に示して詔はく、命を誤たず、悪しき神を射むと為る矢の至れらば、天若日子に中らずあれ。(アメワカヒコの派遣)

タカギは、アメワカヒコ(天若日子)の派遣後にタカミムスヒの別名として登場する。アメワカヒコの派遣時までは、タカミムスヒという名で、アマテラス(天照大御神)と並んでいた。

そして、タカギは「うけひ」を試み、飛んできた矢を投げ下ろしてアメワカヒコを殺してしまう。

2、是を以て、此の二神、出雲国の伊耶佐の小浜に降り到りて、十掬の剣を抜き、逆まに浪の穂に刺し立て、其の剣の前に踏み坐て、其の大国主神を問ひて言ひしく、天照大御神・高木神の命以ちて、問ひ使はせり。(建御雷神の派遣)

アメワカヒコの次に派遣したのが雷神のタケミカヅチ(建御雷神)である。そのタケミカヅチがオホクニヌシ(大国主神)に地上の支配権を譲渡するようにアマテラスとタカギの詔命を伝える。

3、爾くして、天照大御神・高木神の命以て、太子正勝吾勝勝

速日天忍穗耳命に詔ひしく、今、葦原中国を平げ訖りぬと白す。故、言依し賜ひし随に、降り坐して知らせ」とのりたまひき。(天孫降臨)

地上の支配権の譲渡を約束させたタケミカヅチは高天原へ戻り、平定の完了した旨をアマテラスとタカギに報告する。そして、アマテラスとタカギは子のオシホミミ(忍穗耳命)に降臨を命じる。

4、此の御子の高木神の女、万幡豊秋津師比売命に御合ひして、生みし子、天火明命、次に日子番能邇々芸命、二柱ぞ。

故爾くして、天照大御神・高木神の命以て、天宇受売神に詔ひしく、「汝は、手弱女人に有れども、いむかふ神と面勝つ神ぞ。故、専ら汝往きて問はまはくは、『吾が御子の天降らむと為る道に、誰ぞ如何して居る』ととへ」とのりたまひき。(同)

4の伝承の中核は二点ある。一点はニニギ(邇々芸命)がアマテラスの孫であり、支配者はアマテラスの血筋を継承する者であること。二点は、タカギの娘アキツシヒメ(秋津師比売命)がアマテラスの子オシホミミと結婚してタカギとアマテラスが親戚関係を結び、さらにニニギという両神共通の孫が誕生したことでタカギの政治力が強化したことだ。これを機にタカギの影響力は強固なものとなり、中巻の神武紀にまでそれは及ぶ。

5、故、天つ神御子、其の横刀を獲し所由を問ひしに、高倉下

が答へて曰ひしく、「己が夢みつらく、天照大神・高木神の二柱の神の命以ちて、建御雷神を召して詔はく、「葦原中国はいたく騒ぎてありなり。」吾が御子たち、やくさみますらし。その葦原中国は、専ら汝が言向けつる国なり。かれ、汝建御雷神降らさね」とのりたまひき。(神武天皇、熊野の高倉下)

いわゆる神武東征の場面である。熊野へ到着したイハレビコ(神倭伊波礼毘古命)は、大熊と遭遇して毒氣に当たり、一行は生氣を失う。そこにタカクラジ(高倉下)という人物が、太刀を献上して一行を救助した。こうして難を逃れたイハレビコがタカクラジに事の経緯を問うたところ、アマテラスとタカギとタケミカヅチの三神が夢に現れ、タケミカヅチが地上平定の際に使用した太刀をイハレビコに授けるようにと委託されたという。

自らの子孫を常に見守る姿勢が見て取れるが、この場面はタケミカヅチが使用していた太刀で、しかも天から授けられた霊剣であることが重要だ。これを手にすることで、改めて天つ御子が地上の支配者であるという王権の確立が示されているのだろう。

次の場面はタカギの最後の記事である。

6、是に、亦、高木大神の命以て、覚して白ししく、天つ神御子、此れより奥つ方に便ち入り幸すこと莫れ。荒ぶる神、甚多し。今、天より八咫鳥を遣さむ。故、其の八咫鳥、引

道きてむ。其の立たむ後より幸行すべし」とまをしき。(神武天皇、八咫鳥の先導)

高木「大神」としてイハレビコに先導役として八咫鳥を授け、こうした援助によつて結果的にイハレビコは無事に東征を完遂する。気になるのは、それまで一貫して「天照大神・高木神……」とアマテラスが常にいたが、ここでは「高木大神」とあり、アマテラスの名が脱落し、さらに「大神」という敬称表記になっている。

「大神」という敬称については、三浦佑之氏が「原本に高木神天照大御神とあつた三文字が脱落して高木大神になったと判断した。」と考察している¹⁶⁾。しかし、果たしてその判断でよいか。この「大神」も脱落ではなく何らかの意図があつたのではないか。かく言いながらも否定できる理論を持ち合わせているわけではないが、論者は次のような仮説を提示したい。

すなわち、6の記事がタカギの最後の登場箇所というのを踏まえると、ここにタカギの功績が評価され、「神」から「大神」へと昇格したのではあるまいか、と。

例えば、亡き妻イザナミ(伊邪那美命)を追つて黄泉国から戻つたイザナキ(伊邪那岐命)が禊の直後に三貴子を誕生させた後に、伊邪那岐「大御神」とアマテラスと並ぶ最高敬称になったことやサノヲ(須佐之男命)が根堅洲国の主神となつた際、オホヤビコ(大屋毘古神)の口から「大神」と呼称されているのを想起して導き出

した説である。以上、全六つの登場箇所を順に並べてタカギの行動をみてきたが、そのほとんどがタカミムスヒの時と同様、アマテラスと共に高天原にある指令神という性格が強い。しかし、この中からタカミムスヒとは異なる記事がある。それが最初と最後の1と6の伝承だ。

四、雷と鳥の神話

タカミムスヒとの相違点が1と6にあるとしたわけだが、何が異なるかと言えば、行動である。タカミムスヒは常にアマテラスと共にあり、何かを指示する時も授与する時も共同作業である。

それがアメワカヒコの派遣まで続いているのだが、その後にはアメワカヒコの射た矢（天の加久矢）が自分のもとへ届いたところで変化がある。

届いた矢を見ると血が付着しており、タカギは天命に背く意有らば、アメワカヒコに当たり、そうでなければ当たるなど、うけひを試みる。結果的に投げ下ろされた矢はアメワカヒコに当たって死んでしまうわけだが、この矢を投げ下ろす行為がタカギ単体であることに注目したい。

おそらく傍にアマテラスはいたであろうが、矢の投げ下ろしの場面ではアマテラスの存在は薄い。そして、6の八咫鳥の派遣に関してと同様である。「大神」としてイハレビコを安全に導かせるために、

八咫鳥を単体で派遣している。

そして、この二つの単体行動がタカギの実態を示唆しているのでないか。名が変われば性格が変わるとあるように、タカミムスヒに単体行動はない。タカギになった時に発揮された力である。

したがってこの神の解釈はこの二つの伝承をもとに考察する必要がある。

二つの伝承を分別すると、「矢」と「鳥」で、この二つに高木の神であるタカギが深く関わっている。この「矢」については山上伊豆母氏⁽¹⁸⁾が「雷」と指摘していて、上天の神の武器が雷であることの神話が世界各地に認められるという神話学を論拠としている。では、「鳥」はどうか。これも「雷」と大きな関係を持つている。⁽¹⁹⁾

「矢」「鳥」がいずれも「雷」に共通しているという点はすでに神田典城氏も触れていて、「高木神の性格とタカミムスヒ」という大変魅力的な論文に詳しい。⁽²⁰⁾ 神田氏は、「矢」と「鳥」が「雷」と関連することを他国の神話と比較して論を展開している。

それによると、上天の神が「雷」と「鳥」を用いる例がアジア各国に分布していて、中でも類似するのが北方アルタイ諸族の神話だという。

アルタイ諸族の神話はウノ・ハルヴァ氏の『シャマニズム⁽²¹⁾』に記載されていて、その中からタカギの行動と類似するものを取り出すと、次の事例が挙げられる。

A、悪霊を「火の矢」で退治する神が、「雷の起し手」の中でも最も強力な存在であり、エセン・サガン・テンゲリという。

ブリヤート人の見解によれば、悪霊どもは雷を恐れ、雷鳴を聞かぬや、たちまち樹木や石の陰に隠れる。樹木を打ち砕くのは、その矢によるのだと言い、七十七人のかじやが、毎日新しい矢を製造していると言われている。

B、ある英雄が天に着いた。ちょうど地上では、誰かがよその家の庭からかぶらを盗んでいるのが見えたので、老人は怒って大きな石を投げ下ろした。

C、ある時、ある老人が神の命令で地上の人間の暮らしの様子を見ようと下界を眺めると、泥棒が他人の畜群から羊を盗んでいるところであった。老人は怒って神の箱から石を取り出して投げ下ろすと、石は稲光りのように落ちて行って泥棒に当たった。その時から、この男は雷の霊として仕えている。

D、シベリア北端のいくつかの民族は、北米インディアンと同様に、雷を起こす者は鳥の姿をしていると考えている。トゥルハンクス地方のツングースは、雷鳴は、この巨鳥が飛ぶ時の羽音で生ずるという。この雷の鳥は、シャマンが空中を遍歴している間、さまざまな危険からシャマンの魂を守っていると信じられている。必要とあらば、シャマンは雷の鳥を敵に向けて飛ばすこともできる。鳥の巨大な力を証明している

のは、その〈鉄の爪〉が引き裂いたという、稲妻に打ち倒されたあか松である。

E、東サモエド族は、雷の鳥は野鴨の姿をしていると言う。この鳥がくしゃみをするときしゃ降りになる。それがひき起こす雷鳴によって、やはり〈鉄の鳥〉であると考えられている。

F、ユラーク族は、ツングースと同様に、雷の鳥はシャマンの歩き回る魂につきまとって、それを守ると説明する。ある有名なシャマンは、この巨鳥に守られて、一年間空中を動き回っていたと言われる。

右に取り上げた事例は全て「鳥」と「雷」に関する伝承である。タカギにまつわる神話に「鳥」が「雷」であるという伝承はないが、1の記事でも鳴女という「雉」（鳥）がアメワカヒの探索に来て、それをアメワカヒコが射た結果、タカギの手で殺されている。つまり、アメワカヒという天命に背く者アルタイ諸族の伝承で言えばAの「悪霊」ないしB・Cの「泥棒」の立場に相当する。

そして、6の伝承と相当するのが、D・Fだ。「鳥」がシャマンを守護するというのはまさに八咫鳥がイハレビコという王（天皇）を安全に導かんと先導役を担う姿そのものと言えよう。さらに、タカギが1と6の前後でタケミカヅチを遣わしているというのも忘れてはならない。

6では未遂に終わっているが、タケミカヅチの派遣とはこれ雷の

使役に他ならない。ここに「雷」と「木」の深い縁が認められる。

それは、Aの伝承にもある通りで、物理学の理論が現代のように高度なものではなくとも、「雷は高い木（物体）に落ちやすい」という認識が古代からあったということだ。

以上のように、「雷・木・鳥」をキーワードとして考察すると、タカギとは文字通り高木を神格化させた存在で、「雷」と「鳥」を司る神であるという結論に至る。

五、タカミムスヒとの接合

タカギの実態は先に論じた通りであるが、根本的な問題であるタカミムスヒとの接合についてはどう考えればよいか。タカミムスヒはアマテラスと並んで登場し、しかも天つ神へ指令していることから非常に政治的な色の強い神である。そして、『日本書紀』のタカミムスヒ（『日本書紀』では高皇産靈尊）の伝承を踏まえ、アマテラス以前の最高神であったのではいか、という論が数多唱えられている。^② それらの論考でタカミムスヒが北方系の太陽神で垂直的な世界観に位置付けられるという研究がなされてきた。こうした指摘は定説となっている。

ということは、タカギがタカミムスヒと接合される所以はここにあるのではないか。すなわち四節で見えてきた通り、タカギの行動は北方アルタイ諸族に伝わる神話と酷似している。タカミムスヒも北

方的な性格を強く有する神という共通点が結合されたと考える。

そう考えれば、タカミムスヒがムスヒ神であるにもかかわらず、一切その力を発揮しない理由も見えてこよう。「ムスヒ」（産巢日）とは、宣長が『記伝』の中で指摘した通り、万物の「生成」である。

ムスヒ神と言えば『古事記』の冒頭でタカミムスヒと共に高天原に成り出た神カムムスヒ（神産巢日神）がいる。

この神は、オホナムチ（大穴牟遲命）を蘇生させる。また、スサノヲが斬殺した食物神オホゲツヒメ（大宜津比売）の死体から成り出た五穀を種にするなど、「ムスヒ」と力を駆使するのに対して、タカミムスヒにはそうした行為が皆無である。

これは、もともとタカギという高木の神であったからだろう。したがってムスヒとは何ら所縁もない存在だったために、神名と実態が伴わない不自然な存在になったのではないか。それが、カムムスヒに引かれてタカミムスヒという名へ変わったために冒頭のいわゆる「造化三神」の一神になったという三浦氏の論が成立すると思う。

六、おわりに

先行研究と『古事記』からタカギの用例箇所をすべて取り上げ、比較神話学の観点から神田氏の研究を踏襲して論じた。

タカギは、長きにわたって追いかけてきた論者の最大のテーマの一つである。本論がタカギの完全なる解明とまではいかないだろう。

もしかするとこの先まったく違う観点から新たな見解が見出さずともあるだろうし、他の『古事記』を研究する学者によって論考が発表されることもある。ただ、強調したいのは、近年タカギを対象とした研究論文が発表されていなかったということだ。先にも指摘したが、論者の知る限り、最近のタカギの研究は二〇〇六年に発表された溝口睦子氏の「高木神について」で、十一年前の研究ノートであり、論文ではない。論文に仕上げるのができなかった所以は不明だが、溝口氏はその中で、致命的な考察をしている。タカギは『古事記』にのみに見られる神であることを無視して『日本書紀』からの考察を試みていることだ。残念ながら『日本書紀』からタカギを説明することは不可能である。『日本書紀』にタカギという神は出てこないのだから。そしてタカミムスヒに別名というのも、正伝はもちろんのこと異伝にもない。一貫して「高皇産靈尊」という表記である。

溝口氏に限ったことではないが、今までの先行研究は『古事記』と『日本書紀』を混合して考察している傾向が強い。『記紀』という呼称と概念が今なお強く根付いたままのことを示唆していよう。

『古事記』と『日本書紀』はまったくの別物である。対応箇所や相当する伝承は確認できるが、原則として別箇で考察してゆかなければ『古事記』の神髓は見えてこない。タカギという問題を通して強く感じた。

そのことを強く意識して今後も研究に勤しみたい。そして、今後の課題としてはタカギの実態から出てきた「雷」について論を深めてゆければと考えている。

注

(1) 本論で取り上げたタカギの他に、天孫降臨でニギの随伴神が誰を指すかという問題や三輪山に鎮座する大神神社の祭神オホモノヌシ（大物主神）の謎など、まだ多数の難解とされる伝承や神がある。

(2) 例えば、国つ神の代表的な存在であるオホクニヌシ（大国主神）には他に四つの名があり、場面ごとに用いる名が変わっているし、他にはアマテラス（天照大御神）とスサノヲ（須佐之男命）のうけひ（誓約）で誕生した宗像三女神も別名が付されている。このように、神に別名は決して珍しいわけではないが、必ず初出の段階で別名が明記されている。しかし、タカミムスヒの初出で「高木神」という別名はない。

(3) 本居宣長『古事記伝』筑摩書房、一九六八年～一九七四年

(4) 倉野憲司『古事記全註釈』三省堂、一九七三年～一九八〇年

(5) 西郷信綱『古事記注釈』平凡社、一九七五年～一九八九年

(6) 尾崎暢殃『古事記全講』加藤中道館、一九六六年

(7) 注(4)に同じ

(8) 『古事記』の大国主神の系譜でタキリビメ（多紀理毘売）との間に生まれたとあり、「アジシキタカヒコネ」という名だったが、アメワカヒコの葬式に弔問へ訪れた場面では「アジシキタカヒコネ」と変わっていた。これは音韻の変化によって生じたと思われる研究が主だが、なお深い考察を必要とされる。

(9) 戸谷高明『古代文学の研究』桜楓社、一九六五年

(10) 西川順士『古事記と日本書紀——高木神について——』『皇學館大学紀要』

(15) 一九七七年、三月

- (11) 岡田精司『古代王権の祭祀と神話』塙書房、一九七三年
- (12) 上田正昭『日本神話』岩波新書、一九七〇年
- (13) 萩原浅男・鴻巣隼雄『日本古典文学全集』小学館、一九七三年
- (14) 竹野長次『古事記の民俗学的研究』早稲田大学出版部、一九五〇年
- (15) 溝口睦子「高木神について」『十文字国文(12)』二〇〇六年、三月
- (16) 三浦佑之『古事記再発見』KADOKAWA、二〇一六年
- (17) 西郷信綱『古事記の世界』岩波書店、一九六七年
- (18) 山上伊豆母『古代祭祀伝承の研究』雄山閣、一九七三年
- (19) 派遣されたアメワカヒコは、八年にわたって復命せず、しびれを切らしたアマテラスとタカギは鳴女という「雉」を探索に向かわせている。この雉がアメワカヒコの死因のひとつとなる。
- (20) 神田典城「高木神の性格とタカミムスヒ」『古事記年報(24)』一九八二年、一月
- (21) ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳『シャマニズム』三省堂、一九七一年
- (22) この説としては岡正雄氏、岡田精司氏、松前健氏、溝口睦子氏ら四氏の研究が代表的に挙げられる。特に溝口氏は先の三氏の研究に大きな影響を受けていて、「タカミムスヒがアマテラス以前の高天原における最高神で古い太陽神であるという説は、もはや疑う余地がない」と断定的に論じているが、それは早計に過ぎず、議論と研究を必要であろう。
- (23) 注(16)に同じ。

参考文献

神野志隆光・山口佳紀校注・訳『新編日本古典文学全集 古事記』小学館、一九九七年
西宮一民『新潮日本古典集成 古事記』新潮社、一九七九年

